

留学先国名 : アメリカ

留学先学校名 : The State University of New York at Stony Brook

留学期間 : 平成 28 年 1 月 17 日 ~ 平成 32 年 5 月 31 日

今年、昨年の留学準備と比べてもかなり忙しい年になりました。大学の登録や寮・学費に関する手続き、学業と多くの困難にぶつかり英語力だけでなくコミュニケーションや人間力など多方面のスキルを試されることになりました。例えば登録や手続きに関しては留学生専門の窓口があるのですが、この学校は留学生の数が多し一方日本人の割合が低いいためか、窓口の人も大まかな手続きの流れだけを教えてくれるだけで、あとは自分で調べなければならぬかなりの時間を要しました。このとき頼りになったのが先輩でした。日本人の先輩が特に同じ寮や学部にいるというのはとても心強く、頼りになりました。私はそのことをこっぴつについて気付きましたが、留学前から日本人会などについて調べてみるのも重要だと思います。手続きなど助けがほしいのは渡米前からあることです。そういう時に先輩を知っていればいろいろ教えてもらえると思うので、とても助かりますし時間も無駄にせずに済むと思います。

今年前期は英語集中コースと理系授業の同時進行であり、いわゆる普通の生徒よりも宿題が少なく、数少ない教科に専念できたため学校やアメリカの生活に慣れたり、学校内の組織や教授とコネクションを作ることなどに時間を使うことができました。特にキーとなったのは先ほども書いた日本人会。留学中はなるべく英語を使っているいろいろな国の人とコネクションをつなぐべきとはわかってつとも、疲れた時や悩みごとのある時は日本人と話したくなります。学内の日本人会とつながることはある意味で学内にホームを作るようなものだと思います。帰る場所ができたような安心感をもたらしてくれました。さらに日本人会はさらなるコネクションやアクティビティをもたらしてくれました。私が参加したサッカーチームは学内リーグに登録していて、時々他チームとの試合があって学業に疲れたときにちょうどいい息抜きになりました。また日本人会をきっかけに igem(バイオエンジニアリング版のロボコンのような大会)のチームにもつながりができました。まだ決定ではありませんが、これからメンバーにプレゼンをして選ばれば来年のチームに参加できるかもしれません。また、個人的にも教授と将来のクラス選びや学内研究のチャンスなどについて話すことができました。

アメリカに来て感じたことは日本人留学生の少なさと日本人の「国際化」という言葉への認識のずれです。まず、明らかに日本人は少ないです。うちの大学には何千人と留学生がいますが、その大半が中国人、次にインド人、韓国人と続いています。その結果、教授や各種窓口の人も日本に関する知識が少なく手続きに戸惑ったり授業でも日本について間違ったことを教えていたこともありました。逆に中国人はとても把握しきれないほどにいて、オフキャンパスのアパート紹介や乗り合いタクシーのようなコミュニティーまでできています。この前、地元の人に“Asian? Chinese? Korean?” と聞かれました。日本人というのがまず頭に浮かんでなかったようです。そして数が少ないだけでなく、内訳も全然違います。中国人はほとんどが正規留学なのに対し、日本人の場合半分が交換留学などの一時留学、そして残りの半分がコミカレからの編入組で今年の正規留学生は私ともう一人しかいません。そこで私が感じたのは国際化・グローバル化と

という言葉の認識の違いでした。中国人留学生をはじめ多くの学生はグローバル化というものを日本人の思うほど優先順位が高くありません。それはグローバル化というものを、多様性拡大の延長でありもしくは単に規模の問題であることに気付いているからです。例えば日本では多くの大学が半年や一年の留学を提供していたり卒業に必須の活動としています。でもここに来て感じるのは中身が伴っていないのです。この大学でも交換留学生の優先順位の一番は観光で二番に友達作り、三番に落第しないことになっています。僕が思うに本来はこれがしたい、あれを学びたいというのが先にあってそれを日本ではできないから例えばアメリカに来るとというのがグローバル化だと思います。「これからのグローバル化の時代に備えるためにアメリカに行こう」というのは僕からいうと筋からずれているように思います。僕は IT や科学の専門研究と学際的な学びを両立しようと思い日本の大学に限界を感じたので留学しました。英語や留学の前に目標を決めることが大切だと思います。

最後にアメリカに来て思ったのはチャレンジの大切さです。先日もたまたまボストンに行くことになり、せっかくといい複数の MIT・ハーバード大学の教授に初めてメールすると3人の教授があっけなく、ITの未来について2～3時間語らせていただきました。「どうせ～」などと恐れずにトライしてみる大切さを改めて知りました。やったもの勝ち・やらないもの負けの社会を身をもって感じました。